

老いを見つめて

——ドラブルの *The Dark Flood Rises* (2016) —考察——

Climbing to “the Unknown Destination” :

A Study of *The Dark Flood Rises* (2016) by Margaret Drabble

Makiko Kazama

風間 末起子

Abstract

The aim of this article is to examine the vision of twenty-first-century senescence contained in Margaret Drabble’s latest novel, *The Dark Flood Rises* (2016), in which many characters, including the female protagonist Fran Stubbs, are in their seventies or eighties.

Elderly characters in literature have been mostly constrained within certain roles. They represent a bridge between the past and present, wisdom to balance the innovative with the old-fashioned, and an incentive for younger people to return to their hometowns. Great-aunt Drusilla and Mrs. Edlin in Thomas Hardy’s *Jude the Obscure* (1895) are two characters who perform these vital roles.

However, owing to increased longevity, old people in the twenty-first century, at least in developed countries, must consider not only the past and present but also their future or “late life.” Though for some fortunate few, aging may be a “fascinating journey into the unknown” (*Dark Flood*, 20), late life can at the same time be an uncertain, indeterminate sphere linked with inhuman devices to postpone death, Alzheimer’s disease and other forms of dementia, and the sudden ending or “halt” (*Dark Flood*, 194).

This article will investigate the vision of senescence reached by Fran Stubbs, using key phrases—sequence and continuation, severing the past, staircase or ladder, and standstill—as clues to the puzzle of how to approach old age.

キーワード：歴史と連続性、過去の切斷、階段のイメージ、“standstill”

序

本稿の目的は、イギリスの作家マーガレット・ドラブル（Margaret Drabble, 1939-）の最新作 *The Dark Flood Rises*（2016、以下 *Dark Flood* と略す）を取り上げて、「老い」について分析することにある。

ドラブルは、約 35 年前に、第 9 作目の小説 *The Middle Ground*（1980）において、40 歳の女性人物 Kate Armstrong が「中年の危機」（“mid-life crisis,” *The Middle Ground*, 9）にはまり込む姿を描いていた。今回、第 19 作目の最新作 *Dark Flood*（2016）では、70 代半ばの女性 Fran Stubbs を通して、「老年の危機」（“end-of-life crises,” *Dark Flood*, 11）が描かれている。この作品が出版された 2016 年にはドラブルの実年齢は 77 歳であったが、本作品の Fran をはじめ、他の多くの登場人物たちも 70 代、あるいは 80 代の高齢者である。これまでも、ドラブルは登場人物の年齢と自分自身の実年齢をほぼ一致させてきた経緯があるので、70 代のドラブルがとうとう老齢というテーマに取り組んだという感慨を多くの読者は抱くだろう。ドラブルは老いをどのように捉え、どのような問題を提起し、それをどのように解決しているのだろうか。我々の興味は尽きない。

本稿では、歴史と連続性、過去の切斷、階段のイメージ、“standstill”（*Dark Flood*, 191&260）などのキーワードを手がかりにして、本小説における老いについてのビジョンを捉えてみたい。

1. 歴史と連続性

ドラブルは、*Dark Flood* に至るまでの 18 編の小説の中で、過去・現在・未来という時間軸について、作中人物たちに思考させてきた。例えば、第 5 作目の *The Waterfall*（1969）では、人生のガイダンスや解明のための手段として過去の文学作品を読み直し、未来のための新しいプロットと新しい結末を模索しようとした¹。また、第 9 作目の *The Middle Ground*（1980）では、主人公 Kate は中年の危機を抱えもつ現在の苦境から脱し、将来の見通しへの答えを見つけるために過去へと戻っていく。過去の探求、つまり両親と兄との絆を再考するために、Kate は生まれ育った町ロムリー（Romley）を訪れるのである²。さらに、第 16 作目の *The Red Queen*（2004）では、

18世紀半ばの朝鮮王朝と20世紀末のイギリスの現代を結合させて、時代（時間）だけでなく、国（空間）と文化を横断するという実験的な試みを通して、連続性と不確実性の混在という結論を導き出している³。

本稿で取り上げる *Dark Flood* においても、70代という高齢の登場人物たちは皆、彼らの現在と未来を思考するために、歴史と連続性を重視し、人生を連続と続く線と見なしている。

アメリカの詩人・随筆家のメイ・サートン（May Sarton, 1912-1995）は、60代半ばで執筆した日記の中で、ジョン・ホール・ウィーロック（John Hall Wheelock, 1886-1978, 詩人・著述家）の言葉を引用して、老年とは生者と死者の二つの世界、つまり現在と過去の二つの世界を生きることである、という考え方に深く共鳴している（サートン『海辺の家』274）。*Dark Flood* においても、老齢期の登場人物たちは皆、この二つの世界を往き来しながら彼らの現在を思考し、現在が今後の日々とどのように結びついているのかを思念している。

まず、彼らの住居に注目してみよう。70代の Bennett Carpenter（高名な歴史著述家）と、彼のパートナー Ivor Walters（60代）の住まいである。同性愛者のカップルである二人は Bennett の健康のために、数十年前にイギリスを離れて、温暖な気候のランサローテ島に居を構えた。この島はアフリカ西岸沖にあるスペイン領のカナリア諸島（七島）の一つである。ここを終の棲家を選ぶ決め手となったものは、彼らが偶然に見た逞しい庭師の姿であった。その庭師は人間の原初の姿を彷彿とさせ、二人に強い印象を与えた。火山灰の道に迷い込んだ時、二人は石垣に囲まれた小さな石作りのコテージと、赤とオレンジ色の熱帯の花や、アロエ、サボテン、ユーフォビアが植えられた庭を目にする。なかでも、夕陽に映えた赤銅色の背中を見せながら手押し車を押す、老いた庭師の姿は強烈な光景であった。

Once, on their travel, lost on a cinder track as they [Bennette and Ivor] circled through the swirling peaks of the black foot of a volcano, they had seen the strangest of sights : small, low stone cottage, all alone, planted in the midst of the waves of dark and frozen ash. It was surrounded by a low garden wall, a dry stone wall such as we know well in England, but the garden blazed with red and orange tropical blossom and sprouted with spikes of aloe and cactus and giant euphorbia. A stocky old man, naked,

his broad back and shoulders towards them, was trundling a wheelbarrow full of weeds towards a small smoking bonfire. His back was the burned red brown of red clay, he was Adam, he was the first and last man in Paradise. The red sun was setting, tingeing his solid elderly ruddy flesh with its radiance. He was a sight not to be forgotten. (*Dark Flood*, 56)

その後、何度捜しても二人はこの庭師を見つけることができなかつたとある。庭師の姿は夕陽が創り上げた幻視だったのか。それでも、老人の幻影は二人がこの島に棲まう決め手となる。なぜなら、強健な老いた庭師は啓示 (“an augury,” 56) であったからだ。彼らにとって、ランサローテ島は外国の島ではあるが、“a stocky old man” の存在の中に人間の祖アダムを重ね見て、人類の歴史の上に、彼らの「新しい人生」 (“their new life,” 55) を重ね焼きしようとしたと言える。彼らを選んだ家「幸運の家」 (“La Suerte,” 58) は島の内陸部の高台に立地し、背後には火山、前方には海を見渡し、庭には水が流れ、夜には冒険家コロンブスを導いたであろう星が燦然と輝いていた。屋敷の形は噴火を模したシュールリアリズム、つまり地上からのびるキノコを模していた。

“a stocky old man” の幻影は Ivor の目の前に再度現われる。島の首都アレシフェのカフェでお茶を飲んでいた時、Ivor は午後の強い日射しを受けながら、廃墟と化した建物のコンクリートの階段を上っていく老いた男の姿を見る。不屈の表情をした、日焼けしたこの男は重い足取りで階段を上っていた。その後、何度もその男を捜してみたが、男の姿は二度と現われなかつた。Ivor はその老人の出自について、

“an old Guanche, a throwback, one of the dispossessed. A figure from the past. An indigenous figure, not an immigrant.” (*Dark Flood*, 115)

と自問し、その老人が過去から蘇った、島の先住民グアンチェ族の男だったのかと訝る。この男の姿は、Ivor がかつて見た幻影の男、赤銅色の背中を見せて歩いていた庭師の姿と重なる。死者と生者の二つの世界が、先住民の老人と楽園のアダムに似た老人の姿を介在にして、連結されている。さらに、その老人は、フェルデベントウラ島に住む好古家の Simon が世話をしている、セネガルからの漂流移民の青年 Ishmael

となって、現在と未来に連結されている。Ishmael は庭師として、同時に移民の通訳として働き、将来のためにコンピューター・サイエンスの勉強をしている (138-139)。

Bennett と Ivor がグアンチェ族の島で “old man” に出会ったように、Fran の友人で、70代の Jo (Josephine Drummond) は、ケンブリッジの高齢者用に建設された中世ゴシック風の集合住居 Athene Grange (アテナ館) で、“Old Age” (83) というテーマに出会う。戦後に創立された大学の出身者 Jo は、毎週の成人向けクラスで、“On Old Age and the Concept of Late Style” (「老いと晩年の文体について」) というテーマで英詩を教えているので、彼女は過去の文学作品の中で老齡と出会い、現在が過去と連結されている。しかも、Jo は、彼女の研究テーマである ‘deceased-wife’s-sister fiction’ (夫が亡妻の妹と結婚することが非合法であった時代を背景にした小説) を調べていく途上で、*The Fatal Kinship* (『宿命の血縁』) を執筆した女性作家が、スペイン内戦を綴った Bennett Carpenter の著書の索引中に登場する人物、つまり 26 歳で戦死した男の母親であることを発見する。こうして、Bennett の著書の中で母と息子は連結し、Jo は会ったことのない Bennett とも連結することになる (“reunited,” 104)。同時に、Bennett は、「アテナ館」の居住者で、Jo の友人である Owen England (英文学者) のケンブリッジ時代からの旧友でもある。Bennett と Owen の絆は “They had a history together, and a continuation.” (98) と表現されているが、このつながりは登場人物のすべてに行き渡っている。

このように、過去との連結は住居だけでなく、人間関係の中でも明らかである。“continuation” はドラブルの小説の中では馴染みの用語であるが、「連続性」(continuation) と「生き延びること」(survival) への執着と肯定はドラブル小説の最も大きな特徴である⁴。「過去」「連結」「連続」という、ドラブル作品に通底するテーマは、*Dark Flood* においても再度、たたみかけるように強調されている。小説全体が思考の連結で、人物から人物へ、事象から事象につながっていることに、読者は読み進むうちに容易に気づく。まさに小説全体が心の地層の連なりとなっている (“thought sequence,” 111 ; “one sedimentary ancient archaeological layer of his mind,” 111)。

Fran の人間関係も、ロンドン、ケンブリッジ、英国中部の工業都市、遠くはカナリア諸島の一つ、ランサローテ島まで、ウェブのように地理的に広がり、過去と現在が交錯する。Fran と周りの人物たちが抱える問題や興味も、家族の問題から、食事、

老人介護問題、信仰、絵画、北アフリカ諸国とスペインの内乱の歴史、西サハラの独立運動、漂流難民のテレビ・ドキュメンタリー、西アフリカから流れ着いた移民の問題へと、日常的な些事から歴史、社会、国際問題にまで及び、その広がり、大西洋沖のエル・イエロ島近くの火山噴火による地震波動となって、比喩的かつ実際に広がっていく。作品では、「英国人であることはこの現代社会では時代遅れなこと」(“It’s out-of-date, being English, in the modern world,” 198) と Christopher に言わせているが、ドラブルが作家として目指していた、人間関係と共同体の有機的な広がりが、本作品では縦横無尽に展開されている⁵。ドラブルは、英国に基軸を置きながらも、21世紀の作家として、国境を越えた視点の複層性にこだわるのである。そこには、常に過去と現在という時間軸が介在する。

過去との連結というテーマは、ドラブルの小説特有のテーマというよりは、小説においては、高齢者に付与された役割である。例えば、ハーディ (Thomas Hardy, 1840-1928) の最後の小説 *Jude the Obscure* (1895) では、Drusilla 大伯母と Edlin 未亡人の存在は、①新旧をつなぐ絆、②若者が回帰していく場所、③新旧を併せ持つ、バランスとしての英知、といった機能を果たしている。

しかしながら、21世紀の長寿社会では、19世紀の小説で老人が果たした役割の中に、高齢者を閉じ込めることはできないだろう。21世紀の先進国の老人は、経済的に豊かで、知的で、おおむね健康なまま長生きするので、老人は、過去と現在だけではなく、自身の未来をも見据えていく必要がある。そうは言っても、そのロールモデルになかなか出会えない。つまり、老年期は、これまでの人間が体験したことのない「見知らぬ国への魅力的な旅」(“ageing is . . . a fascinating journey into the unknown.” *Dark Flood*, 20) となっていく。では、ドラブルは21世紀の老齡期という期間をどのように捉えているのだろうか。

2. 長寿—見知らぬ国への旅、過去の切断

アメリカの第二波フェミニズム運動の旗手フリーダン (Betty Friedan, 1921-2006) は、『老いの泉』(*The Fountain of Age*, 1993) という大著の中で、これまで忌避されてきた老年に焦点をあてて、多種多様な具体例を取り上げて、老年の実態とその可能性について書き記している。その著書の中で、フリーダンは、人生の最後の季節である老年期には、高齢者は友人や社会から隔離され、お決まりの終末医療で延命すると

いう生き方をするのではなく、自分自身の老後を生きるという、これまでにはなかった新たな冒険に踏み出すべきだと語っている（下6, 下271）。そのためには、若者を計る尺度で老年の価値を測るという従来 of 尺度（若さの役割、目標、規範）を放棄すべきだと宣言する（上22, 上70）。そうすることで、老いの神話は崩されるし、老年期において人は新しい境地に到達できる。その意味で、老年期自体が未知の領域への冒険ではないだろうかと問いかけている。

新しい老年期の一番乗りである私たちにとってどういう生き方の可能性があるのだろうか。老年期という新たに加わった人生の季節を、個人や集団のそれぞれが新しく工夫してすごしている経験を参考として、その中からヒントを探る以外にない。何人かの「天才」の例は知っていても、凡人の私たちに応用できるとはかぎらない（かえって落ち込んでしまうかもしれない）。またある人々は、つまづきながら、新しい道を進み、独自の冒険をしていながら、その意味に気づいていない。しかしその意味がわかるようになった今、私はどこにでも、「冒険としての老年期」を生きている人々をみる。まず大切なのは、心をオープンにして何か新しいことが起こるかもしれないという気持ちを受け入れることである。（フリーダン, 下278）

Dark Flood では、老年期を冒険・新しい体験の機会として捉える生き方を、Fran が実践している。70代半ばのFranは老齡期を“a fascinating journey into the unknown”（20）と考え、公益団体から受け取る僅かな報酬で、老人ホームや高齢者用の住宅を調査するために、落ちつきなく英国各地を愛車で走り回っている。Franはネコを膝に抱いた生活などしたくないと言っている。

on balance she prefers driving restlessly around England, from conference to conference, from housing estate to housing estate, from sheltered home to sheltered home, from gadget to gadget, from Premier Inn to Premier Inn, from soft-boiled egg to soft-boiled egg. She is not ready to settle yet, with a cat upon her knee. (*Dark Flood*, 24)

ボーヴォワール (Simone de Beauvoir, 1908-1986) も、彼女の大著『古い』 (*La*

Vieillesse, 1970) の中で、老人が無為・無用の存在だという意識から解放されるには、人生に意義を与える目的を追求しつづけることがただ一つの方法であると語っている。

それは個人、共同体、公共福祉などへの貢献でもよいし、社会的あるいは政治的な仕事、知的、創造的な仕事でもよい。道学者たちの忠告とは逆に、われわれは老いても強い情熱をもちつづけることを願うべきであり、そうした情熱こそわれわれがいたずらに過去をなつかしむことのないようにするのである。われわれが愛や友情や義憤や同情をとおして、他者たちの人生に価値をおくかぎり、人生は価値をもちつづける。その場合こそ、行動し、あるいは発言する理由が存続するのだ。(ポーヴォワール, 下 313)

だが、目的をもつというのは、実際にはそれほど簡単な作業ではない。Fran は、高齢者用住宅プロジェクトの調査には興味があったし、一人暮らしを選択する 21 世紀の高齢者の暮らし方に関心があったが、一方で、この仕事をするのは人の役に立ちたいというよりは、価値がないという自意識から逃れるための「鎮静剤」でもあった (*Dark Flood*, 298)。50 年近く前に離婚した元夫で寝たきり同然の Claude (元外科医) に食事を毎週届けるのも、ケンジントンの高級アパートで暮らす Claude を慰めるためというよりは、自分に刷り込まれた習性であり、過去の結婚生活の闘いへの償い、死への準備なのかもしれないと思念している (26, 127)。

何かを追求しようとする意志と情熱は、*Dark Flood* では、階段をのぼるという行為によって、繰り返し、比喩的に描かれている。Fran はロンドンの高層アパートで、頻繁に故障するエレベーターを尻目に螺旋階段をのぼっている。

Francesca Stubbs stubbornly climbs the many flights of her concrete tower, marking the new graffiti as she goes. She clenches her teeth tight with fortitude, heaves her bag wearily from shoulder to shoulder, and counts her way up. Like a child, she encourages herself onwards and upwards with counting and climbing rhymes. (*Dark Flood*, 104)

階段をのぼるのは Fran だけではない。中皮腫で余命宣告をされ、病床に伏す Teresa Quinn も自宅の本棚の踏み段をのぼろうとした。Jo もオックスフォードの図書館で書棚用の長いハシゴをのぼっている。Jo にとって、図書館は自分のアイデンティティの確認場所であった。たとえ文学を読むことが「他人の花を集めて、それを束ねる糸だけが自分のもの」(123) であるという空しさを感じたとしても、である。Ivor が幻視したランサローテ島の老いた先住民もコンクリートの階段をのぼっていた。その階段もその建物も、ホテル用地となって、今は取り壊されていた。

豊かな過去の蓄積を背後に抱えながら、先の見えない未来に向かってのぼっていくという階段やハシゴのイメージが示すものは、新たな目的に向かって進んで行く老人の肯定的なイメージを提示しながらも、他方では、新しい場所、新しい人生 (She'd wanted a new place, a new life, 178) を得るためには過去を捨てるという行為も伴うことが明示されている。Fran はパートナーの Hamish と長年暮らしたハイゲートの庭付きの洒落たアパートを売り払って、東ロンドンの公営アパート (Tarrant Towers) に引っ越している。ここは近隣の環境も悪く、郵便番号 (ロンドンの郵便番号は東西南北のようなエリアがわかる) も心地よさを連想させないし、エレベーターも頻繁に故障する。その代わりに手に入れたものはロンドンの空と雲の眺め、黙示録的な夕景であった。

But the view is glorious, the great view over London. She likes to watch the cloudscapes assemble from afar, the great galleons of cumulus sailing her way on the approaching storm ; she likes the red-streaked clouds of evening, the pierced and the torn caverns beyond the beyond of the everlasting blue, the rents and the gashes and the intimations. She endures the lowering blanketed greys of winter, the monotonous dull skies of February, and waits for the opening drama of the spring. Elevate, sublimate, transcend, that's what the view tells Fran. (*Dark Flood*, 31)

Fran は、薄汚れた高層アパートを得るために、庭付きのフラットを捨てた。上昇するために過去が切断されている。この場面は一つの比喩として機能する。友人の Jo も、息子の Christopher も、Fran の高層アパートを、“a Gothic adventure” (83)、“horrible places” (117)、“a stupid idea” (78) とからかい、Fran の選択を年寄りの判断ミ

スと揶揄するが、その無謀な行為の表層下には、Fran の葛藤と決断が内包されている。彼女の上昇は降りる前提のない決死の上昇と言える。

それと同時にのぼり続けることへの不安と迷いも垣間見える。Fran は英国の南西部の湿地帯のウェストモア・マーシュ (Westmore Marsh) に建設された、実験的で意匠を凝らした高級な介護住宅を見学した時、ほんの一瞬、ここで静かな生活を始めようかと心が揺れる。同時に、クロスワード・パズルと iPad をいじっている居住老人たちを眺めながら、ここで一晩過ごしたら退屈で死んでしまうだろうと思う。Fran は、ロンドンで観劇したベケット (Samuel Beckett, 1906-1989) の芝居の Winnie にも賛同できない。首まで土の中に埋もれたまま、死の不安に怯え続ける Winnie (ウィニーはベケットの劇 *Happy Days* [初演は 1961 年] の女性人物) のようになるよりは、負け戦であっても闘い続けることを Fran は選ぶのである。新しい世界への冒険と上昇には、“elevate, sublime, transcend” (31) というゴシック的用語で表現される喜悅の感覚も手に入るが、同時に過去の一部を切り捨てて、迷いながら闘う覚悟も付随する。

Bennett と Ivor もランサローテ島で快適な住まいを手に入れたが、同時に英国に帰国するという選択肢も捨てていた。スペインの不動産市場の暴落のために、彼らの帰国の夢は潰えていた。“a new life” と “new townscapes” (189) を得るために、故国を捨てた同性愛者のカップルの選択は、上昇のために過去を切断した Fran の階段の比喩と重なる。老年期にあっても、人は階段をのぼることができるが、降りる時に恐怖を味わう。病床に伏す Teresa も自宅の踏み段をのぼってはみたが、降りる時には足元がおぼつかなく、脚を踏み外している (281-282)。Jo もオックスフォードの図書館でハシゴをのぼったが、降りる際に困惑し恐怖を感じている (239)。ランサローテ島の Bennette は居間からテラスに通じる階段で転倒し、腰を骨折する (211)。降りる際に恐怖を感じる階段というのは、過去を断ち切ること、そして元に戻れないことの比喩的表現であろう。

本稿の第 1 章でも見てきたように、従来のドラブルの作品と同じように、*Dark Flood* でも過去との連結に重きをおき、老いを考える時も、住まいと人間関係を歴史との連想の中に置き、連綿と続く過去とのつながりを具体的に描いていた。もっと言えば、作品自体が切れ目のない思考の流れとなっていた (“ceaseless monitoring,” 163)。ところが、*Dark Flood* では、過去を切り捨てるという切断のイメージも付加

されている。なぜだろうか。結論を先に言えば、過去との切断のイメージは寸断される未来を予表したものと言える。次の最終章では、“standstill”（行き止まり, 191 & 260）をキーワードに、老いについてのさらなるビジョンを眺めてみたい。

3. “standstill” への覚悟

Dark Flood では、老いについてのアプローチは極めて両義的である。サートンは、老齢期において「人は死へと登ってゆく」（“climbing towards death in naked joy,” Sarton, *After the Stroke*, 128）と表現して、登るという能動的な用語で死を表現したが、*Dark Flood* でも、死者と生者の2つの領域にまたがって生きるのが老齢期の豊かさであり特権であるという考え方が見られた。住まいはそこで生活をする人々だけでなく、死者との連想によっても暖められるという考え方は、本稿の第1章で見たように、Bennett と Ivor の住居にも表象されていた。また、本稿の第2章で眺めたように、老年期は未知なる領域への冒険であるとの肯定的な把握は、英国中を車で走り回る Fran の動的な生き方の中で強調されていた。Fran はネコを膝に抱いた生活などしたくないと言っていた。

一方で、*Dark Flood* では老齢に対して悲観的な見方もする。本稿の第2章で眺めたように、老齢における新しい世界への冒険は降りることのできない階段のメタファーの中で、切断のイメージが濃厚である。この章では、切断から連想される老いのビジョンを探ってみたい。

まず、Paul Scobey (Fran の40代半ばの同僚) の伯母 Dorothy の例を取り上げてみよう。認知症の Dorothy は高齢者用の養護施設に居住しているが、Fran は Paul の頼みでこの伯母と一緒に訪問する。Fran は、小綺麗に化粧をし髪を整えた Dorothy が切れ目なく話し続ける姿を訪問後に思い出しながら、23歳のケア・ワーカーの女が無為・無益という理由で施設の老人を毒殺しようとした衝動が理解できる気がすると言う。統計によれば、大多数の高齢者は延命された最後の数年間を病苦に苛まれて生きるにもかかわらず、21世紀の老人は死ぬことができない。Fran は、長生きは老齢それ自体を台無しにするものだと糾弾する。

Longevity has fucked up our pensions, our work-life balance, our health services, our housing, our happiness. It's fucked up old age itself. (*Dark Flood*, 44)

Dorothy の認知症は日増しに悪化する。彼女は物忘れがひどくなり、いつも物がなくなると言って苛立っている (179-183)。施設の外出日には、100 年前の姿に復元されたレプリカの町を見て、Dorothy はそこが故郷だと思ひ込み、ケア・ホームに帰りたいと泣き出す (263)。

認知症の症例は他にも登場する。Jo の成人クラスでも、母親の介護をする 60 代初めの Sheila という女性がいた。彼女は、成人クラスで習ったイエーツ (W. B. Yeats, 1865-1939) の詩 ‘A Dialogue of Self and Soul’ の第一行目に出てくる「古い螺旋階段」 (“I summon to the winding ancient stair”) にヒントを得て、階段で迷子になった認知症の母親を、自作の詩の中で描いていた。また時には、クラスの皆を笑わせるために、彼女は認知症の母親のエピソードを語っている。母親は化粧品を冷蔵庫に入れたり、ハンドバッグにブラジャーをしまい込んだり、ナイフとフォークを使ってスープを食べようとした (124-127)。イエーツの詩は認知症介護のガイドブックよりも慰めとなったから、Sheila は認知症の深刻さを、人生を肯定するイエーツの詩を媒介に思念し、ユーモラスな語り口で母親の病状を客観化させようとした。

生命には目的があり、終わりがあり、最期の別れがあるはずなのに、21 世紀には最期の旅立ちを延期させてしまう多くの装置がある。感覚がなく、認知できず、薬漬けになったまま、威厳ある死を回避させる 21 世紀の非人間的な装置を見ながら、Fran は高齢者用の養護施設を見学する都度に複雑な思いに駆られた。

A life has a destination, an ending, a last saying. She is perplexed and exercised by the way that now, in the twenty-first century, we seem to be inventing innumerable ways of postponing the sense of arrival, the sense of arriving at a proper ending. Her inspections of evolving models of residential care and care homes for the elderly have made her aware of the infinitely clever and complex and inhumane delays and devices we create to avoid and deny death, to avoid fulfilling our destiny and arriving at our destination. And the result, in so many cases, has been that we arrive there not in good spirits, as we say our last farewells and greet the afterlife, but senseless, incontinent, demented, medicated into amnesia, aphasia, indignity. Old fools, who didn't have the courage to have that last whisky and set their bedding on fire with a last cigarette. (*Dark Flood*, 29)

若者が人生の盛りで死ぬことよりも悲惨なことがこの世にはある、と Fran は息子の Christopher に言ったことがある (*Dark Flood*, 298; Small, 53)⁶。Christopher の恋人である、エジプト系イギリス人の Sara Sidiqi は 38 歳の若さで医療的な判断ミスのために突然死した。若くして死ぬことは残酷なことではあるが、それでも、若死にすることで人は老いを回避できると言い切るほどに、Fran にとって、老いとは、総じて「ヘドの出るおぞましきこと」(*Dark Flood*, “it’s a fucking disaster,” 218) であった。

同時に、老齢にあっては、死は不本意に延期もされるが、死は容赦なく唐突に人を襲う。老人が人生を肯定し、“a new place, a new life” (178) を求めたとしても、老人の未来は極めて短く、不確定である。実際に、Fran は友人 Jo の死に直面するのである。死因は就寝中に起こった不整脈によるものだ。Jo は死ぬ直前まで、来学期の成人クラスの作家選びに勤しんでいた。Fran は、老齢とは停止 (“standstill,” 191 & 260) であると実感する。

ボーヴォワールは、『老い』の中で、

老年はわれわれの人生の「総和」ではない。同一の運動の満ち干きがわれわれに世界をあたえ、それを奪う。われわれはものを覚え、そして忘れる。われわれは豊饒になり、そして破損するのだ。(『老い』下 127)

と述べて、老いが直面する鮮烈な二律背反を明言している。若者は未来を無限のものと思いがちだが、老人の未来は不確定であり有限である。一步踏み出せば、「境界石」(ボーヴォワール下 124; “the boundary-stone,” 421) に突き当たる。この行き止まりの感覚が何かをしようとする熱意を失わせるとボーヴォワールは言う。

Dark Flood では、この “halt” (194) の感覚は洪水のイメージで描かれている。Fran は高齢者用住宅を調査するために、ロンドンから南西部に向かって車を走らせるが、その途上、大雨で増水した道路上で立ち往生する。車の座礁 (“stranded,” 194, 203, 217) は、友人 Jo の寸断された生命と連結される。水による行き止まりのイメージは、次の訪問地のランカシャーの街ブラックプール (Blackpool)、つまり黒い水溜まり (下水) とも連結され (“supreme ugliness,” 302, 318)、補強されている。ドラブルは第 9 作目の小説 *The Middle Ground* (1980) においても、Kate の故郷と家族の歴史を連結させるために下水の臭いを用いていたが、水は何かを連想させるための

媒体としてドラブルが好んで使う道具である。

Fran は、Jo の唐突な死を通して、老いの抱える短命な未来を痛感し、その残酷さを嘆くが、同時に、突然の死は宿命という印象を与えるから、その意味で、「見事な死」(“the heroic death,” *Dark Flood*, 4) でもあった。

She [Jo] hadn't even had time to say goodbye. Fran has tried to get her mind around the abruptness of Jo's leaving, but it's hard. She tells herself that Jo had died the perfect death, but that puts the burden of living squarely back on her. She's got to keep going. There's nothing else to do. You keep going until you can't go any further. And you can't count on the perfect death, at the end of the run. (*Dark Flood*, 314)

Fran は、Jo の死を受容するために、完璧な死という言葉でその潔さを思念し、自身の短い未来を覚悟していく。しかも、「見事な死」は当てには出来ないとの覚悟も肝に銘じながら、である。このように、死はたたみかけるように強調され、高齢者に付きまとう不確定な未来と切斷される未来への覚悟が思念される。

結 び

サートンは、上質の日記は生と死についてのエッセイとなると語っていたから(『82歳の日記』103)、日記を書くという行為はサートンにとっては死の準備だったと言えよう。*Dark Flood* の Fran の場合は、老いや死の両義性を抱き留めながら、当てにならない未来を覚悟しながら、つまり死を念頭におきながら、英国中を車で走り続けるという行動を選択している。それが彼女の死の準備の仕方であった。

小説の最終場面では、絶壁からの下降ではないが、プラトー現象⁷と言える状況での下降、つまり、一段一段、徐々に下降するイメージで Fran の老化が描かれている。

It's been a very long two months. She'd been a lot younger, two months ago. She'd been walking steadily on a plateau, for years, through her sixties into seventies, but now she's suddenly taken a step down. That's what happens. She knows all about it. She's been warned many times about this downwards step, this lower shelf. It's not a cliff of fall, but it's a descent to a new kind of plateau, to a lower level.

(Dark Flood, 319)

この下降のイメージは、ブラックプールのホテル Premier Inn のレストランで出会った4歳の少年へと連結されていく。少年が遊ぶおもちゃのレーシングカーはテーブルの上、メニューの上、皿の上、チャパティの上、そしてテーブルの端まで走って、Franのイスの下に落下する。Franはそれを拾い上げ、“You’re the best!” (323)と言って、おもちゃの車を少年に返してあげる。このおもちゃの車と違って、Franは死に向かって急降下はしないが、一段一段、ゆっくりと下っている。Franの状況は、幼い少年の成長するスピードと対照的に並べられている。この出来事のあと、彼女はあるビジョンを得ている。

It’s a small moment, but it will see her more cheerfully on her way, in the morning, to the unknown destination. Seeing it through, that’s the best she can do. (*Dark Flood*, 323)

少年との些細なやり取りは、若い世代への生の連続性の実感という、ドラブルの従来テーマの反復と解釈できよう。それと共に、「最後まで見届ける」(“seeing it through”)という表現には、輝くことはできないかもしれないが、これまでのように死ぬまで切れ目なく、やり通していくことへの決意の表明が見られる。

小説のタイトルとなっている“dark flood rises”は、D. H. ロレンス (D. H. Lawrence, 1885-1930) の晩年の詩 ‘The Ship of Death’ から引用した一節であるが、“rise”という用語はドラブルが好んで使う単語でもある。第9作目の *The Middle Ground* (1980) の最終場面では、Kateが階下のホームパーティに降りていく時に、“She rises.” (*The Middle Ground*, 248) と表現されていた。「彼女は立ち上がる」という表現には、今後も起こり得る危機に立ち向かうKateの覇気と、危機から立ち直る回復力が宣言されていた。

Dark Flood の“rise”は高波との連想から、「死が迫る」という意味で使われているので、77歳のドラブルは死を強く実感する方向に思いを向けている。作品では、洪水、高波、冠水の連想が常に立ちはだかり、死との連想が濃厚である。しかしながら、その背後には生の鼓動も感じられる。老年にあっては、人は死によって停止を強

いられるが、死の不確実性を恐れずに、死を思いながら（準備しながら）、最後まで「生を見届けていく」。これが、さまざまな人物を通して老いを見つめる中で Fran が得たビジョンである。新しい発見と言えるような特別なビジョンではないが、これが、奇をてらうことなく差し出された老いへのまなざしと言えよう⁸。

註

- 1 拙著『フェミニズムとヒロインの変遷—ブロンテ、ハーディ、ドラブルを中心に』127-146.
- 2 拙論「ホームカミングードラブルの *The Middle Ground* における過去」309-318.
- 3 拙論「ドラブルの “the new ‘her-story’”—*The Red Queen: A Transcultural Tragicomedy* (2004) 考」1-22.
- 4 拙論「母と娘の関係—Margaret Drabble の *Jerusalem the Golden* (1967) 一考察」79；拙論「‘domestic language’ の使用—ドラブルの *The Garrick Year* 一考察」126.
- 5 ドラブルは、1980年のインタビューの中で、ジョージ・エリオット (George Eliot, 1819-1880) の小説の有機的な広がり調和について称賛している。その意味でシャーロット・ブロンテ (Charlotte Brontë, 1816-1855) に喩えられるよりも G. エリオットに喩えられるほうが嬉しいとも言っている (Diana Cooper-Clark, 23)。*The Middle Ground* (1980) 出版以降、ドラブルは、G. エリオット的な小説を目指して執筆しているように思われる。
- 6 ドラブルは、*Dark Flood* のあとがきの謝辞の中で、この小説を完成させるにあたって、老いを哲学と文学から解釈・分析した Helen Small の研究書 *The Long Life* (2007) から知的刺激を受けたことを伝えている (*Dark Flood*, 327)。
- 7 Helen Small は、75 歳以上の高齢者における死亡率の減少について言及している。この現象は、高齢期における “plateau-effect” (プラトー現象) として表現されている。ドラブルは、高齢期におけるこの進化理論から影響を受けて、小説中で言及したようである (Small, 249-250 & 271)。
- 8 *Dark Food* は、323 ページの本編を終えたあと、“Envoi” (結び) と題する 2 ページほどの短い章が付加されている。ここでは、小説の登場人物たちの「その後」が語られている。Bennett の死、Ivor がイギリスの修道院経営のケアホーム

で老後を迎えたこと、Fran, Claude, Simon のそれぞれの死、Owen が彼らより長生きしていること、Fran の娘 Poppet の様子、息子 Christopher とセネガルの青年 Ishmael が亡き Sara の果たせなかったプロジェクト（アフリカから海を渡る移民のドキュメンタリーフィルムの作成）を実現させようとカナリア諸島からクルーと共に旅立ったこと等が淡々と短く語られている。この小説の書評を書いた Valeire Miner は、できれば日常生活の機微を添えながら、Fran が英国中を車で旅する場面で小説を終えてほしかったと記している（Miner, 28）。私も読後感として、Miner の意見に同感である。

引用・参考文献

- Beauvoir, de Simone. *Old Age*. (1970). Translated by Patrick O'brian. Harmondsworth : Penguin Books Ltd, 1977.
- Beckett, Samuel. *Happy Days* (A Play in Two Acts). New York : Grove Press, INC, 1961.
- Cooper-Clark, Diana. "Margaret Drabble : Cautious Feminist." *Atlantic Monthly*, 246, No.5 (Nov. 1980) : 69-75. *Critical Essays on Margaret Drabble*. Ed. Ellen Cronan Rose. Boston : G. K. Hall & Co., 1985. 19-30.
- Drabble, Margaret. *The Garrick Year* (1964). London : Weidenfeld and Nicolson, 1964.
- . *Jerusalem the Golden* (1967). London : Weidenfeld and Nicolson, 1967.
- . *The Waterfall* (1969). London : Penguin Books, 1971.
- . *The Middle Ground* (1980). London : Weidenfeld and Nicoloson. 1980.
- . *The Red Queen : A Transcultural Tragicomedy* (2004). London : Viking, 2004.
- . *The Dark Flood Rises*. New York : Farrar, Straus and Giroux, 2016.
- Friedan, Betty. *The Fountain of Age*. New York : Simon & Schuster, 1993.
- Gratton, Lynda and Andrew Scott. *The 100-Year Life*. London : Bloomsbury Information, 2016.
- Hardy, Thomas. *Jude the Obscure* (1895). With an Intro. By Terry Eagleton and notes by P. N. Furbank. London : Macmillan, 1974. The New Wessex Edition.
- Sarton, May. *The House by the Sea* (1977). New York : W.W.Norton & Company · INC, 1977.

- . *After the Stroke: A Journal* (1988). New York/London: W.W.Norton & Company, 1988.
- . *At Eighty-Two: A Journal* (1996). New York/London: W.W.Norton & Company, 1996.
- Small, Helen. *The Long Life*. Oxford: Oxford UP, 2007.

[和書]

- ボーヴォワール, ド・シモーヌ 『老い』 上下2巻, 京都, 人文書院, 2013.
- ドラブル, マーガレット 『昏い水』 武藤浩史訳, 東京, 新潮社, 2018.
- フリーダン, ベティ 『老いの泉』 上下2巻, 山本博子, 寺澤恵美子訳. 新潟, 西村書店, 1995.
- グラットン, リンダ/アンドリュー・スコット 『100年時代の人生戦略』 池村千秋訳, 東京, 東洋経済新報社, 2016.
- 風間末起子 「母と娘の関係—Margaret Drabble の *Jerusalem the Golden* (1967) —考察」 『学術研究年報』 同志社女子大学, 第46巻 I, 1995: 55-84.
- 「‘domestic language’ の使用—ドラブルの *The Garrick Year* —考察」 『学術研究年報』 同志社女子大学, 第55巻, 2004: 119-127.
- 「ホームカミング—ドラブルの *The Middle Ground* における過去」 『上山泰教授喜寿記念論文集』, 大阪, 大阪教育図書, 2005: 309-318.
- 「フェミニズムとヒロインの変遷—ブロンテ、ハーディ、ドラブルを中心に」 京都, 世界思想社, 2011.
- 「ドラブルの “the new ‘her-story’”—*The Red Queen: A Transcultural Tragicomedy* (2004) 考」 『文学研究科紀要』, 同志社女子大学大学院, 第13号, 2013: 1-22.
- サートン, メイ 『海辺の家』 武田尚子訳. 東京, みすず書房, 1999.
- 『82歳の日記』 中村輝子訳. 東京, みすず書房, 2004.

[Book Review]

- Miner, Valerie. “The Journey Into the Unknown: *The Dark Flood Rises*.” Rev. of *The Dark Flood Rises*, by Margaret Drabble. *Women’s Review of Books*. Jan/Feb Vol.35

Issue 1, 2018 : 27-28. EBSCOhost. Doshisha Women's College of Liberal Arts Lib. 16 March 2018. <<https://web.a.ebscohost.com/ehost/delivery?sid=adbc3f58-63a6-4163-9103-91dbed7c6>>

Ozick, Cynthia. "Death and Disaster Stalk the Characters in Margaret Drabble's New Novel." Rev. of *The Dark Flood Rises*, by Margaret Drabble. *New York Times*. Feb.14, 2017. ProQuest. Doshisha Women's College of Liberal Arts Lib. 25 Feb. 2018. <<https://search.proquest.com/docview/1867892929/fulltext/>>

Rhodes, Emily. "'The Dark Flood Rises,' by Margaret Drabble." Rev. of *The Dark Flood Rises*, by Margaret Drabble. *The Spectator*, Nov.5, 2016. ProQuest. Doshisha Women's College of Liberal Arts Lib. Feb.25, 2018 <<https://search.proquest.com/docview/1835435329/fulltext/>>

